

273 子宮体部Mixed Müllerian Tumorの臨床病理学的検討

癌研, 病理部*

手島英雄, 古田玲子*, 加藤友康, 片瀬功芳,
梅沢聡, 己斐澄子, 藤本郁野, 山内一弘,
荷見勝彦

〔目的〕Mixed Müllerian Tumor(MMT)は5年生存率が10%前後と予後が悪く, 発生頻度は低いが, 子宮体癌に比較して高齢者が多く, 今後, 発生の増加が考えられる腫瘍である。その病態を明らかにするために臨床病理学的に検討した。〔対象と方法〕1949年から1990年までの52年間の当科の全婦人科癌12,123例中43例(0.35%)が子宮体部MMTと診断された。これら43例について, 患者背景, 手術前の細胞診, 生検そして手術摘出標本について肉眼所見, 病理組織所見, リンパ節転移の有無について検討した。〔成績〕1) 年齢は23歳から82歳平均59.6歳であった。主訴は不正出血が37例で, 他に帯下を認めた。高血圧は10例, 肥満は2例, 糖尿病は3例に認めた。放射線治療の既往がある症例は2例であった。重複癌は, 子宮頸癌2例, 乳癌, 膀胱癌の各1例であった。2) 治療前細胞診評価可能38例中, 18例が腺癌と診断され, 8例がMMTと正診され, 5例が陰性であった。治療前組織診評価可能42例中, 25例がMMTと正診され, 12例が腺癌, 5例が肉腫と診断された。3) 腫瘍は子宮底部発生が多く, 外向発育性でポリポイドあるいはポリープ状で, 表層は出血や壊死を伴っていた。組織学的には脈管侵襲が顕著で, リンパ節転移は, リンパ節廓清の行われた25例中7例で, 転移先の組織像は5例が腺癌で, 2例が癌肉腫であった。〔結論〕1) 高齢者で不正出血を主訴とする場合は, 細胞診だけでなく, 必ず組織生検を行う必要がある。2) リンパ節転移先の組織像から, 予後を左右するのは腺癌成分である可能性が示唆された。

274 子宮ミューラー管混合腫瘍の培養と組織発生についての考察

石渡産婦人科病院

石渡千恵子, 石渡 勇

〔目的〕混合腫瘍の組織発生には3つの仮説がある。すなわち, Collision theory:癌と肉腫がそれぞれ別の部位に発生し互いに増大して癌と肉腫が混在する。Composition theory:癌が間質に浸潤する際に刺激された間質にblast化がおこり肉腫が混在しているかに見える。combination theory:癌と肉腫に分化しうるbi-potential な細胞が悪性化し, 癌と肉腫に分化し, その結果, 癌と肉腫がdiffuseに混在する。という説である。我々は癌肉腫(腺癌と平滑筋肉腫)、中胚葉性混合腫瘍(腺癌と横紋筋肉腫)の培養成績(混合腫瘍からそれぞれ癌と肉腫細胞株を樹立)からcombination theoryを支持してきた。今回これら株細胞のin vitroでの混合細胞集塊像とヌードマウス腹腔移植の転移巣の組織形態から, 組織発生についての検討を加えた。〔方法〕用いた細胞株は子宮癌肉腫由来の腺癌細胞株(HWUA)と平滑筋肉腫細胞株(HWUS)、子宮中胚葉性混合腫瘍由来のstem cell(HIRS-BM)、腺癌細胞株(HIRS-BMA)、横紋筋肉腫細胞株(HIRS-BMS)、さらに子宮癌肉腫株(HTMMT:stem cell?:ヌードマウス移植不可)である。これらの細胞をそれぞれに単独または混合して水平旋回培養(7日間)し, 形成された細胞集塊を検討した。ヌードマウス腹腔移植は 1×10^7 個の細胞を移植し, 5週目に解剖し, 転移巣を組織学的に検討した。〔成績〕HWUAは低分化腺癌を, HWUSは肉腫を, HWUA+HWUSは癌肉腫を, HIRS-BMAは腺癌を, HIRS-BMSは肉腫を, HIRS-BMA+HIRS-BMSは癌肉腫を, HTMMTは癌肉腫を形成した。腹腔移植で転移するのはHIRS-BM株だけであった。肝, 肺, 脾, リンパ節, などに転移し, 腺癌と横紋筋肉腫からなる混合腫瘍を形成した。〔結論〕ミューラー管混合腫瘍はcombination tumorである。